

淺茅生

泉鏡花作

一

鎧かねの聲こゑも響ひびいて來こぬ、風かぜのひつそりした夜よるながら、  
時刻じこくも丁ちやうど丑うし満みつと云いふのである。・・・此この月つき  
から、桂かつらの葉はがこぼれ／＼、石いしを伐きるやうな斧きのが入はい  
つて、もつと欠かけると、やがて二十六夜やの月つきに成なら  
う、・・・二十日はつかばかりの月つきを、暑あつさに一枚まいし  
め残のこした表おもて二階かいの雨戸あまとの隙間すきまから覗のぞくと、大空おほそらばか  
りは雲くもが走はしつて、白々しろ／＼と、音おとのない波なみかと寄よせて、  
通とほりを一ツ隔へだてた、向むかうの邸やしきの板塀いたべい越こしに、裏葉うらはの翻かへ  
つて早はや秋あきの見みゆる、櫻なぐらひの樹きの梢つらを、ばつと照てらし  
て、薄明うすあかるく掛かるか、と思おもへば、颯さつと墨すみのやうに曇くも  
つて、月つきの面おもてを遮さへぎるや否いなや、むら／＼と亂みだれて走はしる

ト火ひ入れに燻くべた、一把は三錢せんがお定さだまりの、あの、  
萌黄もえぎ色の蚊遣かやり香かうの細ほそい煙けむりは、脈々みやく／＼として、そして、  
空行そらゆく雲くもとは反はん對たいの方ほうへ靡なびく。

其そのの小机こづくゑに、茫乎ぼんやりと頰杖ほゞづゑを支ついて、待人まちびとの當あてもなし、爲せう事ことござなく、と煙草たばこをふかりと吹ふかすと、

「おらは呑氣のんきだ。」

と煙けむりが輪わに成なる。

「此方こつちは忙いそがしい。」

と蚊遣香かやりかづは、小刻こきざみを打うつて畝うなつて、せつせと燻いぶる。

が、前まへなる縁えんの障子しやうじに掛かけた、十燭しよくと云いふ電燈でんとうの明あかりの届とどかない、昔むかしの行燈あんどんだと裏通うらどほりに當あたる、背せ中のあたり暗くらい所で、蚊かがブーンと鳴なく・・・其そのの、陰氣いんきに、沈しづんで、殺氣さつきを帶おびた様子やうすは、燈けむりにかいふいて遁にぐるにあらず、落着おちつき澄すまして、人ひとを刺ささむと、鋭すどき嘴くちばしを鳴ならすのである。

で、立騰たちのはり、煽あふり亂みだれる蚊遣かやりの勢いきほひを、ものゝ數かずともしない工合くあひは、自若じじやくとして火山くわざんの燒石やけいしを獨ひとり歩あ行るく、脚あしの赤あかい蟻ありのやう、と譬喻たとへを思おもふも、あゝ、蒸むし熱あつくて夜よが寝ねられぬ。

些そよとの風かぜもがなで、明放あけはなした背後うしろの肱掛窓ひぢかけまどを振向ふりむいて、袖そでで其そののブーンと鳴なくのを拂はらひながら、此この

二階住の主人唯吉が、六疊やがて半ばに蔓る、自分の影法師越しに透かして視る、雲ゆきの忙しい下に、樹立も屋根も静まりかへつて、町の夜更けは山家の景色。建続く家は、なぞへに向うへ遠山の尾を曳いて、其方此方の、庭、背戸、空地は、飛々の谷とも思はれるのに、涼しさは氣勢もなし。

「暑い。」

と自棄に突立つて、胴體ドタンと投出すばかり、四枚を兩方へ引ずり開けた、肱かけ窓へ、拗ねるやうに突掛つて、

「やツ、」

と一ツ、棄鉢な掛聲に及んで、其の敷居へ馬乗り  
に打跨がつて、太息をほツと吐く・・・

風入れの此の窓も、正西を受けて、夕日のほとぼりは激しくとも、波にも氷にも成れとて觸るき、爪下の廂屋根は、さすがに夜露に冷いのであつた。

爾時、唯吉がひやりとしたのは――

此の廂はづれに、階下の住居の八疊の縁前、一一坪

に足らぬ明取りの小庭の竹垣を一つ隔てたばかり、  
裏に附着いた一軒、二階家の二階の同じ脇掛窓が、  
南を受けて、此方とは向を異へて、つい目と鼻の間  
にある・・・其處に居て、人が一人、燈も置か  
ず、暗い中から、此方の二階を、恚う、・・・  
窓越しに透かすやうにして涼むらしい姿が見えた事  
である。――

「や、」

たしかに、其家は空屋の筈。

唯さへ、思ひ掛けない人影であるのに、又其の影が、星のない外面の、雨氣を帯びた、雲に染んで、屋根づたひに茫と來て、此方を引包むやうに思はれる。

が、激しい、強い、鋭いほどの氣勢はなかつた。

闇に咲く花の、たとへば面影はほのかに白く、あはれに優しくありながら、葉の姿の、寂しく、陰氣に、黒いのが、ありとしも見えぬ雲がくれの淀んだ月に、膜朧と取留めなく影を投げた風情に見える。

雨夜の橘の其には似ないが、弱い、細りした、花か、空燻か、何やら薫が、たよりなげに屋根に湛うて、何うやら其の人は女性らしい。

「婦人だと尚ほ變だ。」

唯吉は、襟許から、手足、身體中、柳の葉で、さら／＼と擽られたやうに、他愛なく、むず／＼したので、ぶる／＼と肩を揺つて、

「此は暑い。」

と呶くの有機會に、跨いだ敷居の腰を外すと、窓に肱を、横ざまに、胸を投掛けて居直った。

爾時だつたが、

「え、え、」と、小さな咳を、彼方の其の二階でしたのが、何故か耳許へ朗らかに高く響いた。

其が、言を番へた、豫て約束の暗號でゞもあつた如く、唯吉は思はず顔を上げて、其の姿を見た。

肩を細く、片袖をなよ／＼と胸につけた、風通しの南へ背を向けた背後姿の、腰のあたりまで586  
仄に見える、敷居に掛けた半身で帯と髪のみ艶やかに黒い。浴衣は白地の中形で、模様は、薄月の空を  
行交ふ、――又少し明るく成つたが――雲に  
紛るゝやうであつたが、つい傍の戸袋に風流に絡まり掛つた蔦かづらが其のまゝに染まつたらしい。  
薄手の、中だかに、すつと鼻筋の通つた横顔。  
唯吉を見越した端に、心持、會釋に下げた頸の色が、鬢を透かして白い事！  
美しさは

其のみ成らず、片袖に手まさぐつた團扇が、恰も月を招いた如く、弱く光つて薄りと、腋明をこぼれた膚に透る。

褌はづれさへ俵ばるゝ、姿は小造りらしいのが、腰掛けた背はすらりと高い。

髪は、ふさ／＼とあるのを櫛巻などに束ねたらしい・・・でないと、肱かけ窓の、然うした處は、高い鬚なら鴨居にも支へよう、其がやがて二三寸、灯のない暗がりには、水際立つまで、同じ黒さが、くつきりと間をおいて、柳は露に濡れつゝ濃かつた。

恚う、唯吉が、見るも思ふも瞬く間で、

「暑うござんす事・・・」

と其の人の聲。

此方は喫驚して黙つて視める。

「貴方でもお涼みでいらつしやいますか。」

と直ぐに續けて、落着いた優しい聲なり。

何を疑つて見た處で、其のものゝ言ひぶりが、別

人に人があつて、婦と封向ひで居る様子には思はれないので、

「えゝん。」

とつけたらしい咳を、唯吉も一つして、

「何うです．．．．此のお暑さは。」と思切

つて、言受けする。

「酷うござんすのね。」

と大分心易い言ひ方である。

「お話に成りません．．．．彼岸も近い、残暑もドン詰りと云ふ處へ来て、まあ、何うしたつて云ふんでせうな。」

言ひ交はすのも窓と窓の、屋根越なれば、唯吉は上の空で、

「はて、何だらう、誰だらう．．．．」

「でも、最もお涼しく成りませう……此がおなごりかも知れません。」

と静な聲で、慰めるやうに窓から云つたが、其の一言から冷たくなりさうに、妙に身に染みて、唯吉は寂しく聞いた。

蟲の聲も頻に聞える。

其の蟋蟀と、婦の聲を沈んで聞いて、陰氣らしく、「其だと結構です……でないと遣切れません。何うか願ひたいもんでございます。」

と言ふうちに、フト其の（おなごり）と云つたのが氣に成つて、此だと前方の言葉通り、何うやら何かおなごりに成りさうだ、と思つて黙つた。

少時人の住まない、裏家の庭で、此の折から又颯と雲ながら月の宿つた、小草の露を、揺こぼしさうな蟲の聲。

「まあ！……」

と敷居に、其の袖も帯も靡くと、ひら／＼と團扇が動いて、やゝ花やかな、そして清しい聲して、  
「御挨拶もしませんで……何うしたらいいでせう……何て失禮なんでせうね、貴方、御免なさいまし。」

「いゝや、手前こそ。」  
と待受けたやうに、猶豫はず答へた……

「暑さに變りはないんです、お互様」と唯吉は、道理らしいが、何がお互様なのか、相應はない事を云ふ。

「お宅では、皆さんおやすみでございますか。」  
「如何ですか、寐られはしますまい。が、蚊帳へは疾くに引込みました……お宅は？」  
と云つて、唯吉は屋根越に、また透かすやうにしたのである。

「……」  
「婦は一寸言淀んで、  
「あの……實は、貴方をお見掛け申しまし

たから、其の事をお願ひ申したいと存じまして、それだもんですから、つい、まだお知己でもございませぬのに、二階の窓から濟みませぬえ。」

「何、貴女、男同士だ、と何うかすると、御近所づから、町内では錢湯の中で、素裸で初封面の挨拶をする事がありますよ……」

「ほゝ。」  
と脣に團扇を當てゝ、それなり、たをやかに打傾く。

唯吉も引入れられたやうに笑ひながら、  
「串戯ぢやありません、眞個です……で  
すから二階同士結構ですとも……そして、  
私に……とおつしやつて、貴女、何でござい  
ます……御遠慮は要りません。」

「はあ……」  
「何でございます。」

「では、お頼まれなすつて下さいませぬの。」  
「承りませう。」

と云つたが、窓に掛けた肱が浮いて、唯吉の聲が

少々忙しかつた。

「貴方、可厭だとおつしやると、私、怨むんです

よ。」

「え、」

と、一つあとへ呼吸を引いた時、雲が沈んで、蟋蟀の聲、幻に濃く成んぬ。

「．．．．可厭な蟲が鳴きます事．．．．」

と不圖、獨言のやうに、且つ何かの前兆を豫め知

つたやうに女が言ふ。

「可厭な蟲が鳴きます？．．．．」と唯吉は

釣込まれて、つい饒舌つた。

が、其處に、又此處に、遠近に、草あれば、石あ

れば、露に啣く蟲の音に、未だ嘗て可厭な、と思ふ

はなかつたのである。

「貴女、蟋蟀がお嫌ひですか。」

と、うら問ひつゝ、妙な事を云ふぞと思ふと、う

っかりして居たのが、また悚然とする．．．．

四

「雲が衝と離れると、月の影が、對うの窓際の煤けた戸袋を一間、美人の袖を其處に縫留めた蜘蛛の巢に、露を貫いたが見ゆるまで、颯と薄紙の露を透して、明かに照らし出す、と見る間に、雲つて、また暗くなり行く中に、もの越は、蟲の音よりも澄んで聞えた。

「否、つゞれさせぢやありません。蟋蟀は、私は大すきなんです。まあ、鳴きますわね。……可愛い、優しい、あはれな聲を、誰が、貴方、殿方だつて……。お可厭ではないでせう。私のやうなものでも、義理にも、賺ひだなんて言はれませんがの。」

「ですが、可厭な蟲が鳴いてる、と唯今伺ひましたから。」

「あの、お聞きなさいまし……。一寸……  
・まだ外に鳴いて居る蟲がござんせう。」

「はあ、」

と唯吉は、恰もいひつけられたやうに、敷居に掛

けた手の上へ、横ざまに耳を着けたが、可厭な、と云ふは何の聲か、其は聞かない方が望ましかつた。

「遠くに梟でも鳴いて居ますか。」

「貴方、蟲ですよ。」

「成程、蟲と梟では大分見當が違ひました。・・・續いて餘り暑いので、餘程茫として居るやうです。失禮、可厭なものツて、何が鳴きます。」

「あの、きり／＼きり／＼、棲させ、てふ、肩させ、と鳴きます中に、草ですと、其の底のやうな處に、露が白玉を刻んで拵へました、寮の枝折戸の銀の鈴に、芥子ほどな水鶏が音づれますやうに、ちん・ちん・と幽に、そして冴えて嘶くのがありませう。」

「あゝ・・・近頃聞いて覺えました・・・・・鈕たゝきだ、鈕たゝきですね。や、あの聲がお賺ひですか

「否、」

と壓へる、聲が沈んで、

「聲が賺ひなのではありません。不厭なところで  
はないんですが、名を思ふと、私は悚然としま  
す……」

と言つた。

其の氣を受けたか、唯吉は一息に身體中總毛立つ  
た。

「だつて、其だつて、」

と力が籠つて、

「可哀さうな、氣の毒らしい、あの、しほらしい、  
可愛い蟲が、何にも知つた事ではないんですけれど、  
でも私、鉦たゝきだと思ひますだけでも、氷で殺し  
て、一筋づゝ、此の髪の毛を引抜かれますやう  
に……骨身に應へるやうなんです……  
蟲には濟まないと存じながら……眞個に因果  
なんですわねえ。」

と染々言ふ。

「唯吉は敷居越に乗りしながら、

「何か知りませんが、堪らないほど可厭なお心持  
らしく伺はれますね……では、大抵分りまし

た．．．．．手前にお頼みと云ふのは、あの．．．．．ちん、ちんの聞えないやうに、蟲を捕へて打棄るか、何うにかしてくれろ、と云ふんでせう．．．．．と其奴は一寸困りましたな。其方の．．．．．貴女のお庭に、ちよろ／＼流れます遣水のふちが、此の頃は大分茂りました、露草の青いんだの、蓼の花の眞赤なんだの、美しくよく咲きます．．．．．其の中で鳴いて居るらしいんですがね。．．．．．

蟋蟀でさへ、其の蟲は、宛然夕顔の種が一つこぼれたくらゐ小くつて、なか／＼見着かりませんし、．．．．．何うして掴まりつこはないさうです．．．．．貴女がなさいますやうに、雪洞を點けて探しました處で、第一、形だつて目に留るんぢや、ありますまい。」

と唯吉もこゝで打解けたらしく然う云つた。

今は、容子だけでも疑ふ處はない．．．．．去年春の半ば頃から、横町が門口の、其の數寄づくりの裏家に住んだ美人である。

其の年の夏が土用に入つて、間もなく．．．．．

仔しさい細さいあつて・・・・  
其家そのいへには居ゐなくなつた筈はずだと  
思おもふ。

庭は唯垣一重、二階は屋根續きと云つても可い、  
 差配も一つ差配ながら、前通りと横町で、引越蕎麥  
 のおつき合の中には入つて居らぬから、内の様子は  
 一寸分らぬ。

殊に其の家は、風通しも可、室取りも可、造作、  
 建具の如きも、こゝらに軒を竝べた貸家とは趣が達  
 つて、其に家賃もかつかうだと聞くのに・・・  
 不思議に越して来るものが居着かない。

入るか、と思ふと出る、塞がつたと思へば空く。  
 半月、一月、三月、ものゝ半年も住馴れたのは殆ど  
 あるまい・・・處で氣を着けるでもなく、唯吉  
 が二階から見知越な、時々其の家の主も、誰が  
 何時のだから目紛らしいほど、ごつちやに成つて、髯  
 やら前垂やら判然と區別が着かぬ。

其の中に、今も忘れないのは、今夜口を利いて居  
 る此の美人であつた。・・・

唯吉が雇つておく、お媼さんの説では、何うも人の妾、かくし妻であらうと云つた。其が引越して来た當時、女主人と云ふにつけて、其の庭の片隅に植わつた一本の柳の樹、これが散ると屋根、もの干越に、蓑を着て渡りたい銀河のやうに隅田川が見えるのに、葉が茂る頃は燕の羽ほどの帆も、ために遮られて、唯吉の二階から隠れて行く。・・・  
・ 對手が百日紅だと焼討にも及ぶ處、柳だけに不平も言へぬが、口惜くない事はなかつた。――其さへ、何となく床しいのに、此の邊にしては可なり廣い、其の庭に石燈籠が据つたあたりへ、巴を崩したやうな、たゞきの流を拵へて、水をちよろ／＼と走らした。其も、女主人の、もの數寄  
で。・・・

兩方のふちを挟んで、雑草を植込むだのが、やがて、蚊帳つり草になり、露草になり、紅蓼になつて、夏のはじめから、朝露、夕露。・・・夜は姿が隠れても、月に倂の色を宿して、蟲の聲さへ、薄りと淺黄に、朱鷺に、其の草の花を綾に織つた。・・・

「今度裏の二階家へ越して来た人は、玉川さんと云ふのだらう。」

お媪さんが、其の時……

「おや、御存じの方で在らつしやいますか。」

「知るものかね、けれども然うだらうと思ふのさ。」

當推量だがね。」

「今度、お門札を覗いて見ませうでございます。」

「いや……見ない方が可い、違ふと不可い

から、そして、名はお京さんと云ふんだ……」

「お京さま……」

「何うだい、然う極めておかうぢやないか。」

「面白い事をおつしやいます……ひよつと

かして當りますかも知れません。貴方、然ういたし

ますと、何う云ふか御縁がおあんなさいますかも知

れませんよ。」

「先づ、大丈夫、女難はないとき。」

こんな事からお媪さんも、去年……其の當座、かりに玉川として置く……其家の出入りに氣を附けたやうだつたが、主人か、旦那か知らず、通つて來るのが、謹深く温ましやかな人物らしくて、

あからさまな夏なつに成なつても、一度ひとも姿すがたを見みなかつたと云いふ。

第一だい、二階かいの其窓そのまどにも、階下したの縁先えんさきにも、とり／＼に風情ふぜいを添そへる、岐阜ぎふ提灯ちやうちんと、鐵燈籠かりどうろう、簾すだれと葭簣よしすの涼すずしい色いろ。何どうかすると石いしの手水鉢てうづばちが、柳やなぎの影かげに青あをいのすに、清きよらかな掛手拭かけてぬぐひが眞白まっしろにほのめくばかり、廊下らうかづたひの氣勢けはひはしても、人目ひとめには唯軒ただのきの葱しのぶ。

六

「裏の美しいのは、旦那様・・・坊主の持も  
のでござります・・・」

道理こそ、出入りを人に際して形を見せぬと、一  
晩お媪さんが注進顫で、功らしく言つた事を覚えて  
居る。・・・

臺所の狭い張出しで、お媪さんは日が暮れてから  
自分で行水を使つた。が、蒸暑い夜で、糊澤山な浴  
衣を抱きながら、涼んで居ると、例の柳の葉越に影  
が射す、五日ばかりの月に電燈は点けないが、二階  
を見透の表の縁に、鐵燈籠の燈ばかり一つ、峰の堂  
でも見るやうに、何となく浮世から離れた様子で、  
滅多に顔を見せない其の女主人が、でも、端近へは  
出ないで、座敷の中ほどに一人で居た。

其の様子が、餘所から帰宅つて、暑さの餘り、二  
階へ遁げて涼むらしい・・・

「羅も脱いで、帯も解いて、水のやうなお襦袢ばかりで、がっかりしたやうに、持った團扇も動かさないで、くの字なりに背後へ片手支いて居なさる處……何うもお色の白い事……乳の邊は其の團扇で、隠れましたが、細りした二の腕の透いた下に、ちらりと結び目が見えました……扱帯の端ではござりません……確かに帯でござりますね、月も最う餘程らしうござります……成程人目に立ちませう。」

此で以て、あの方が、一寸も庭へも出なさらぬ譯も分りました、おみもちでござりますよ。「  
と其の時お媪さん抜衣紋で、自分の下阪を壓へて言つた。」

「其が何うして、坊主の持ものだと知れたんだらう。」

「處が旦那様、別嬪さんが、然うやつて、手足も白々と座敷の中に涼んで居なさいます、其の周圍を、ぐる／＼と……床の間から次の室の簀戸の方、裏から表二階の方と、横肥りにふとつた、惟子か何

でござりまするか、ぶわ／＼した衣ものを着ました坊  
さんが、輪をかいて廻つて居ります。其の影法師が、  
鐵燈籠の幽かすか明あかりで、別嬢さんの、しどけない姿の  
上へ、眞黒に成つて、押かぶさつて即えました。そ  
んな處へ誰が他人を寄せるものでございます。・  
・・まはりを廻つて居た肥つた坊さんは、確に、  
御亭主か、旦那に違ひないのでございますよ。」

「はてな・・・其が又、何だつて、蜘蛛の巣  
でも掛けるやうに、變に周圍を廻るんだ。」

「其は貴方、横から見たり、縦から見たり、種々  
にして樂みますのでございます。妾などと申します  
ものは、然うしたものでございますとさ。」

「いや、恐れるぜ。  
と其なり濟む。」

日は經ち、月はかはつたが、暑さが續く。分けて  
雨催ひで風の死んだ、羽蟲の夥しい夜であつ  
た。・・・一度線を曳いて窓へ出して、ねばり  
着いた蟲の數を、扱くほど、はたきに掛けて拂ひ棄  
てたが、もとへ据ゑると、見る／＼うちに堆いまで、

電燈のほやが黒く成つて、ばら／＼と落ちて、むら／＼と立ち、むず／＼這ふ。

餘り煩くつて、パチンと捻つて、燈を滑した。

曇つた空の星もなし、眞黒な二階の裏の背戸の  
子窓で、――こゝに今居るやうに――唯吉が、  
ぐつたりして溜息を吐いて、大川の水を遮る・・・  
・葉の動かない裏家の背戸の、其の一本柳を、熱々  
凝視めて居た事があつた。

其處へ病上りと云ふ風采の中形の浴衣の清らかな  
白地も、夜の草葉に曇る・・・なよ／＼とした  
博多の伊達巻の姿で、つひぞない事、庭へ出て來た。  
其の時美人が雪洞を手につけて居たのである。

ほつれた鬘まげに、黄金きんの平打ひらうちの簪かんざしを、照々てら／＼と左插ひだりさし。  
くつきりとした頸脚えりあしを長くなが此方こなたへ見みせた後姿うしろすがたで、遣やり  
通水みづのちよろ／＼と燈影ひかげに揺ゆれて走はしる縁へりを、すら／  
＼薄彩うすいろに刺繡ぬいとりの、數寄すきづくりの淺茅生あさぢふの草くさを分わけつゝ  
歩行ひるふ、素足すあしの褌つまはづれにちらめくのが。白々しろ／＼と露つゆ  
に輕かるく・・・柳やなぎの絮わたの散ちる風情ふせせ。

植うゑ添そへたのが何時いつか伸のびて、丁度ちやうど咲出さきでた桔梗ききやうの  
花はなが、浴衣ゆかたの袖そでを左右さいうに分わかれて、すらりと映うつつて二  
三輪りん、色いろにも出でれば影かげをも宿やどして、雪洞ぼんぼりの動うごくまゝ、  
靜しづかな庭下にはげ駄たに靡なびいて、十歩じゅうほに足たらぬそゞる歩行あるきも、  
山路やまぢを遠とほく、遙々はる／＼と辿たどるとばかり視ながめ遣やる・・・

間まもなかつた。

さつと音おとして、柳やなぎの地摺ぢすりに枝垂しだれた葉はが、裾すそか  
ら渦うずを巻まいて黒み渡わたつて、揺ゆれると思おもふと、湯氣ゆげに  
蒸むしたやうな生暖なまぬあい風かぜが流ながれるやうに、ぬら／＼と  
吹掛ふきかゝつて、哄どっと草くさも樹きも煽あふつて鳴なつたが、据すそ、袂たもとを、

はつと亂すと、お納戸の其の扱帯で留めた、前褻を絞るばかり、淺黄縮緬の蹴出が搦んで、踏出す白脛を、草の葉の尖で危く留めて・・・と、吹倒されさうに撓々と成つて、胸を反らしながら、袖で雪洞の灯をぴつたり伏せたが、フツと消えるや、よろ／＼として、崩折れる状に、縁側へ、退りかゝるのを、空なぐれに煽つた簾が、ばたりと音して、巻込むが如く姿を掻消す。

「其の雪洞の消えた拍子に、晃乎と唯吉の目に留つたのは、鬢を抜けて草に落ちた金簪で・・・・・・濕やかな露の中に、尾を曳くばかり、幽な螢の影を残したが、ばう／＼と吹亂れる可厭な風に、幻のやうな蒸暑い庭に、恰も曠野の如く瞰下されて、やがて消えても瞳に残つた、簪の蒼い光は、柔かな胸を離れて行方も知れぬ、・・・・・・其の人の人魂のやうに見えたのであつた。・・・・・同じ夜の寝る時分、

「裏家では、今夜、お産のやうでございます・・・・・・」

と云つた、お媪さんは、あとじさわに蚊帳へ潜つ

た。

風は凧んでも雨にも成らず・・・激しい暑さに寝られなかつた、唯吉は齧方に成つてうと／＼するまで、垣根一重の隔てながら、産聲と云ふものも聞かなかつたのである。

「お可哀相に・・・あの方は、昨晩、釣臺で、病院へお入りなすつたさうでございます。」

「やあ。産が重かつたか。」

「嬰兒は死んで出ましたとも申しますが、如何でございませうか、何にしるお氣の毒でございませうねえ。」

二月ばかり経つと、婆やが一人、留守をしたのが引越したツ切、何とも、其れぎり様子を聞かずに過ぎす。

「生死は知らぬが、・・・いま唯吉が、屋根越に、窓と窓とに相封して、もの云ふは即ち其の婦人なのである。・・・」

「まあ、」

と美人は、團扇を敷居に返して、ふいと打消すらしく、其の時云ふやう。

どんなに私が厚顔しうござんしたつて、贅溝に蟲を捕つて、棄てゝ下さいなんぞと、そんな事が申されますものですか。あの……」

涙手な聲ながら、姿ばかりは愼ましさうに、

「そんな事ではありません。お願いと申しますのは……」

今は其の頼みと云ふのを聞かないわけには行かなく成つた！……聞かう、と唯吉は胸を轟かす。

「何うぞ、貴方、私が今夜此處に居りました事を、誰にも仰有らないで下さいまし。……唯それ

だけでございます。」  
と軽く言ふ。

「餘り仔細のない事を、聞いて飽氣なく思ふほど、唯吉は尚ほ氣に掛る……昔から語継ぎ言傳へる例によると、誰にも言ふ勿と頼まるゝ、其の當人が……實は見ては成らない姿である場合が多い。

「はあ、誰にもですね。」  
自分の見たのは、と云ふ心を唯吉は寡聞ひかけ

「否、それまででもないんです……誰にも

と言ひますうちに、差配さんへは、分けて内證になすつて下さいまし。」

「可うござんすとも……が、伺うしてゝす。」

と問返すうちにも、一層、妙な夢路を辿る心持のしたのは、其の差配と云ふのは、こゝに三軒、鼎に成つて、例の柳の樹を境に、同じくたゞ垣一重隔つるのみ。で、……形の如き禿頭が、蚊帳に北向きにも寝て居ると、分けて其は平屋であるため、二人は丁度夢枕に立つて、高い所で、雲の中に言を交はして居るやうな形に成るから。……

「御存じの通り、」

と、差配の棟の上の其ためか、婦人は聲を密めたが、電車の軋も響かぬ夜更。柳に渡る風もなし、寂然として、よく聞える……たゞ空走る雲ばかり、月の前を騒がしい、が、最初から一ツ一ツ、朗な聲が耳に響くのであつた。

「此處は牢屋に成つて居ります……昨年住んで居ましたつて最う何の縁もありませんものが、夜中、斷りもなしに入つて参りましたんですもの。」

知れましては申譯がありません。 . . . .

つい、あの、通りがりに貸家札を見ましたもの  
ですから、誰方もおいでなさらないと思ひますと、  
何ですか可懐くつて、

と向を替へて、團扇を提げて、すらりと立つた。  
美人は庭を差覗く . . . . 横顔は尚ほ、くつきり  
と、鬢の毛は艶増したが、生憎草は暗かつた。

「御尤です . . . . あんなに丹精をなさいまし  
たから . . . . でも、お引越しなすつたあとでは、  
水道を留めたから、遣水は涸れました。しかし、草  
は其のまゝです . . . . 近頃までに、四五度、越  
して来た人がありましたけれども、何う云ふものか  
住着きませんから、別に手入れもしないので、貴女  
のおもの好のまゝに残つて居ます、 . . . . 秋口  
には、去年は、龍膽も咲きましたよ。 . . . .  
露草は今盛りです . . . . 桔梗も澤山に殖えま  
した . . . .

月夜なんざ、露にも色が染るやうに綺麗で

す．．．．お庇かを被かつて、いゝ保ほ養やうをしますのは、  
手前てまへども。

お禮れい心しんに、燈あかりを點つけておともをしませう．．．．  
町まちを廻まはつて、門かどまでお迎むかひに參まゐつても可ようござん  
す．．．．庭にはへ出でて御ご覽らんなさいませんか。

最もも、雪ほん洞ぼりと云いふ、様やう子の可い處ところは持もち合あはせがあ  
りません。」

とうつかり喋しゃべ舌へる。

「まあ、よくお覽おほえなすつて在いらつしやるわね。」

「忘れわすれませんもの。」

「後ご生しやうですから、」

と衝つと戸とぶくろ袋ふくろへ、立たち身みで斜なめに近ちかづいて、

「あの時ときの事ことはお忘わすれなすつて下くださいまし．．．

．．．思おも出ひだしても慄ぞ然つとするんでございますか

ら．．．．」

「うつつかりして、此方こつちから透す見きをされた、とお思おも

ひですか。」

「否いえ、可い厭やな風かぜが吹ふいたんです．．．．そして、

其その晚ばん、可お恐そい、氣き味みの患わるい坊ぼさんんに、忌い々ましい鉦かね

を叩たかれましたから．．．．」

唯たゞ吉きちは、  
思おもはず、  
乗のかゝつて居ゐた  
胸むねを引ひく。

九

婦人の手が白く戸袋の端に見えた……近く、  
此方を差覗くよ。

「あの……實は貴方が、繪を遊ばすつて事を存じて居りましたものですから、……お恥かしうござんすわね……」

と一寸言淀む。

唯吉は浮世繪を描くのである。

「私は其の節、身重なんでございましたの……  
……ですから、浅ましい處を、お目に掛けますのが情なくつて、つい、引籠つてばかり居りました所、何ですか、あの晩は心持が、多時庭へも出られなからうと思はれましたので、密と露の中を、花に觸つて歩行いて見たんでございます。

生暖い、風に當つて、目が、ぐら／＼としました  
つけ……産所へ倒れて了ひました。嬰兒は死んで生れたんです。

其も唯、苦しいので、何ですか夢中でしたが、今でも覚えて居りますのは、其時、錐を、貴方、身節へ揉込まれるやうに、手足、胸、腹へも、ぶる／＼と響きましたのは、カン／＼！と刻んで鳴らす鉦の音だつたんです。

丁ど後産の少し前だと、後に聞いたんでございですが、参加はせました、私ども主人が、あゝ、可厭な音をさせる．．．折の悪い、．．．産婦の私にも聞かせともなし、早く退いて貰はうと、框の障子を開けました．．．鉦を叩くものは、此の貴方、私どもの門に立つて居たんですつて、」

「其の横町の．．．」

「はあ、」

「何です．．．鉦を叩くものは？」

「肥つた坊主でござんしたつて、」

「えゝ？」

すると．．．其の婦人の主人と云ふの

は．．．二階座敷の火のない中を、媚かしい人

の周圍を、ふら／＼とまはり繞つた影法師とは違ふらしい。

「忌々しいではありませんか。主人が見ますと、格子戸の外に、黒で、卍をおいた薄暗い提灯が一つ・一つ・一つ・尤も一方には、朱で何かかいてあつたさうですけれど、其は見えずに、卍が出て・・・・黄色黒い、あだ汚れた、だゞつ廣い、無地の行衣見たやうなものに、鼠の腰衣で、づんぐり積肥りに、ぶよ／＼と皮がたるんで、水氣のありさうな、蒼い顔のむくんだ坊主が、・・・・あの、居たんですつてーそして、框へ出た主人を見ますと、鉦をたゞき止めて、朦とした卍の影に立つて居ました。

(何だ?・・・・)

主人も、容體の悪い病人で、氣が上づつて居て突掛るやうに申したさうです。

「騒々しい!・・・・急病人があるんだ、云つて下さい。」

然うしますと、坊さんが、蒼黄色に、鼠色の身體

を揺つて、唾を一杯溜めたやうな、ねば／＼とした  
聲で、

(其の病人があるので廻るいの・・・)

コンと一つ敲いて見せて、

(薬賣りぢやに買ひないな、可え所へ来たでや。  
ツて、ニヤリと茶色の齒を見せて笑つたさうで

す・・・

(可い所とは何だ無禮な、急病人があると云ふの  
に、) と極めつけますとね。・・・

(お身様が赫と成つたで、はて、病人の症も知れ  
た・・・血が上るのでや・・・)

と頷いて、合點々々をするんですつて、

唯吉は、こゝで聞くさへ堪へられぬばかりに思ふ。

「不埒な奴です・・・何ものです。」

「まあ、お聞きなさいまし・・・」

「主人は、むら／＼と気が苛れて、早く追退けよ  
うより、何より、

（何だ、何だ、お前は。）

と急込むのが前に立つ。

（弘法大師・・・）

カーンと又鉦を叩いて、

（御夢想の薬ぢやに・・・何の病疾も速かに  
治るで、買ひないな・・・丁ど、來合はせたまは、  
あなた構お導きぢや・・・仇には思はれます  
な。）

（要らないよ。）

（爲に成らぬが、）

と、額に蜘蛛のやうな皺を寄せて、上目で、ぢろ  
りと見ましたつて、

（お導きで來合はせた薬を買はいでは、病人が心  
許ない。お頂きなされぬと、後悔をされうが。）

（死んでも構はん、早々と歸れ。）

（斃ちても可えか・・・はあ、）

と呆れたやうに大きな口を開けると、卍を頬張つ

たらしい、上顎一杯、眞黒に見えたさうです。

(是非に及ばん事のこと。)

カン／＼と鉦を叩きながら、提灯の燈を含みましたやうに、鼠の腰衣をふは／＼と薄明るく膨らまして、行掛けに、鼻の下を伸ばして、足を爪立つて、伸上つて、見返つて、其れなり町の角を切れましたつて。

「是非に及ばぬ・・・」

可厭な辻占でしたわねえ。」

と俯向いて一寸言が途絶え・・・

「やがて、其の後から、私は身體を載せられて、釣臺で門を出ました。」

大橋邊の、病院に参ります途中・・・私は顔を見られるのが辛うござんしたから、

とももの思ふ状に雲を見た。雲は、はツ／＼と、月が自分で吐出すやうに、むら／＼と白く且つ黒い。

「お星様一ツ見えないほど、搔卷を潮被つて、眞暗に成つて行つたんです。

（清正公様の前だよ．．．煎豆屋の角、唐物屋の所．．．水天宮様の横通．．．）

と所々で、ー 釣臺に着いてくれました主人が聲を掛けて敬へますのを、あゝ、冥土へ行く路も、矢張り、近所だけは知つた町を通るのかと思ひました。私は死にさうな心持。

そして、路筋を聞かしてくれませぬ、主人の聲のしませんが、絶えず蟲が鳴きましたつけ。前に、身體の一大事と云つた時に、あの鉦を聞かされましたのが耳に附いて．．．蟲の中でも、あれが、鉦たゝきと思ふばかりで、早鐘を撞きますやうな血が胸へ躍つたんです．．．又．．．後で主人に聞きますと．．．釣臺が出ますと、それへ着いた提灯の四五尺前へ、早や、あの、卍をかけたのが、重つて點れて、すつ／＼と先を切つて歩いたんださうです。」

「其、其の坊王が、」

「えゝ．．．．遠くへも行かないで、――薬  
を買はなかつた仇をしに――待受けてでも居た  
のでせう．．．．直き二丁目の中程から、然うや  
つて提灯が見え出したさうですが、主人かつて、忌  
はしからうが何うしようが、薬賣りが町を歩くの  
に、故障を言へるわけはありません。」

何だつて、又．．．．大病人を釣臺でかゝへて  
居て、往來、喧嘩も出来ない義理ですから、睨付け  
て其のまんま歩行いたさうです。

たゞ、あの、此處は、何處．．．．其處．．．  
．．．と私に言つて聞かしました時分だけは、途切れ  
たやうに其の提灯が隠れましたつて。清正公様の前、  
煎豆屋の角、唐物屋の所、水天宮様の裏通り、とそ  
ツち此方で、一寸々々見えなく成つたらしいんです  
が、．．．．」

「すぐに、正が出て、ふつと前へ通つて行きます。最う、其を見ると、口惜しさが胸を線つて、咽喉を詰めて、主人は口も利けなかつたさうなんですよ。

其の主人の黙つてますうちは、私が鉦たゝきに五體を震はす時でした。．．．尤も、坊主は、唯ぼんやりと鼠の腰法衣でぷら／＼と前へ立ちますばかり、鉦は些とも鳴さなかつたつて事でした。．．．

カン／＼カン／＼と、不意に目口へ打込まれるやうに響きました。

私は気が遠くなつて了つたんです。

口へ冷いものが入つて、寢臺の上に居るのが分かりましたつけ。．．．坊主が急に鉦を鳴らしたのは、丁ど、釣臺が病院の門に入る時だつたさうです。

其の門が、又。．．．貴方、表でもなければ潜りでもなくつて、土堀へついて一廻り廻りました、大な椎の樹があります、裏門で木戸口だつたと申すんです。

尤も、二時過ぎに参つたんですから、門も潜りも閉つて居て、裏へ廻つたも分りましたが、後に聞けば何うでせう・・・其の木戸は、病院で、死にました死骸ばかりを、密と内證で出します、其のために、故と夜中に明けとくんですつて、不浄門！・・・

随分ですわねえ。ほゝゝほ、

と寂しい笑顔が、戸袋へひつたりついて、ほの白く此方を覘いて打傾いた。

「唯吉は又慄然とした。

「坊主は何うしました。」

「心得たもの、貴方・・・」

と聲が何故か近く来て、

「堀から押かぶさりました、其の大きな椎の樹の下

に立つて、半紙四つ切りばかりの縦長い　　　膏

薬でせう　　　其を提灯の上へ翳して、はッは

ッ、

と云ふ、婦人は息だわしいやうで、

「と黒い呼吸を吐掛けて居たんださうです・・・

・  
・釣臺が摺違つて入ります時、びたりと、木戸の

柱にはつて、上を一つ蒼黄色い、むくんだ掌で撫でましたつて……

悄乎と其處へ入ると、其のトタンに、カンノカ  
ン。

釣臺は、しつかり蓋をした、大な古井戸の側を通つて居ました。

「餘りですから、主人が引返さうとした時です……薬賣の坊主は、柄のない提灯を高々と擧げて、椎の樹の梢越しに、大屋根でも見るらしく、仰向いて、

(先づは送つたぞ……)

と聲を掛けると、何處かで、

(御苦勞。)

と一言、婦の聲で言ひましたさうです……おやと思ふと、灰色の扉が開いて、……裏口ですから、油紙なんか散らかつた、廊下のつめに、看護婦が立つて、丁ど釣臺を受取る處だつたんですつて。

主人は、此の方へ氣を取られました、が、其つ切り、藥賣は影も形も見えませんが、あの……」  
と一息。で、

「此は、しかし私が自分で見たものではありません。其から、私は私の方で、何か、あの、ござんした。

變な事が。

其の時に、次手に主人が話して聞かせたんで  
す……私なたゞ其の鉦の音が耳について耳に  
附いて、少しでも、うと／＼としようとするれば、枕  
に撞木を當てゝ、カン／＼と鳴るんですもの……  
・昔、うつゝ實とか申すのに、どら、ねう鉢、太  
鼓を一齊に敲くより、鉦ばかりですから、餘計に  
脈々へ響いて、貫つて、其の苦しさがたら、日に三  
度も注射の針を刺されます、其の痛さなんぞなん  
もない！」

「貴方……そんなに切なくつたつて、一寸寝返り所ですか、醫師の命令で、身動きさへ成りません。足は裾へ、素直に揃へたつ切、兩手は腋の下へ着けたつ切、で熟として、たゞ見舞が見えます、扉の開くのを、便りにして、入口の方ばかり見詰めて見ました。

實家の、母親、姉なんぞが、交る／＼附いて居てくれます他に、其の扉ばかり膽めましたのは、人懐かしいばかりではないのです……續いて二人、三人まで一時に入つて来れば、吃と其が、私の臨終の知らせなんぞでせうから、すぐに心掛りのないやうに、遺言の眞似ごとだけでもしませうと、果敢いんですわねえ……唯そればかりを的のやうにして目を睜つて居たんですよ。

然うしますとね、苦しい中にも、氣が濟むつて言ふんでせう……窓も硝子も透過つた秋の、高い蒼空を、も一つ漉した、それは貴方、海の底と、云つて可いか何と申して可いんでせう、寒の月の底

へ入つて、白く凍つたやうにも思へます。玲瓏つて云ふんですか、自分の手も、腕も、胸なんぞは乳のなり、薄搔卷へすつきりと透いて、映つて、眞綿は吉野紙のやうに血を壓へて、骨を包むやうなんです。

清々しいの、何のつて、室内には塵一ツもない、あつても其が矢張り透過つて了ふんですもの。壁は一面に玉の、大姿見を掛けたやうでした、色は白いですがね。

ト最う、幾日だか、晝だか夜だか分りません、けれども、ふつと私の寢臺の傍に坐つて居る……見馴れない人があつたんです。

「え、何ですつて、」  
と思はず聲を出して、唯吉は窓から頸を引込めた。

「私は傍目も觸らないで、瞳を凝と撓めて視たんですが、つひぞ覚えのない人なんです……四十七八、五十ぐらゐにも成りませうか、眉毛のない、面長な、仇白い顔の女で、頬骨が少し出て居ます。薄い髪を結び髪に、きちんと撫つけて、衣紋をすつと合はせた……あの、其の襟が薄黄色

で、而して鼠に藍がゝつた、艶々として底光りのする衣服に、何にもない、白い、丸抜きの紋着を着て、幅の狭い黒縹子らしい帯を些と低めに締めて、胸を眞直ぐに立て、頤で俯向いて、額越に、ツンとした権のある鼻を向けて、丁ど、私の左の脇腹のあたりに坐つて、あからめもしないと云、つた風に、ものも言はなければ、身動きもしないで、上から、私の顔を見詰めて居るぢやありませんか。

其が貴方・・・變な事には、病室で、私の寢臺の上に、然うやつて仰向けに寝て居ますんでせう。左の脇腹のあたりに坐りました、其の女性の膝は、寢臺の縁と、すれ／＼の所に、宙にふいと浮上つて居るのですよ。」

唯吉は押黙つた。

「・・・恚う、然まで骨々しう瘦せもしない両手を行儀よく膝の上に組んだんですが、其藍がゝつた衣服を膝頭へするりと、搔込みました、襟が揃つて、其の宙に浮いた下の床へ、すつと、透通るや

うに長々と落ちて居るんです。

朝と思へば朝、晝、夜、夜中、明方、もうね、一度其が見えましてから、私の覚えて居ますだけは、片時も、然うやって、私の顔を凝視めたなり、上下に、膝だけ摺らさうともしないんです。

可厭で、可厭で、可厭。何とも、ものにたとへやうがなかつたんですが、其の女性の事について、何か言はうとすると、誰にも口が利けません。・・・

・  
・  
身體が釘づけに成つたやうなんでせう。

唯其の中にも、はじめて嬉しさを知りましたのは、私たちが婦の長い黒髪です。・・・白い枕に流れるやうに掛りましたのが、自分ながら冷々と、氷を伸ばして敷いたやうで、一條でも風に纏れて來ますのを、舌の先で吸寄せますと。・・・乾いた口が涼く成つて、唇も濡れたんですから。」

「氷嚢や、注射より、たゞ髪の毛の冷いのが、きつけない成つて、幾度も、甦り、甦り、甦る度に、矢張同じ所に、ちゃんと膝に手を組んで見て居ます。」

何か知りませんが、幾らも其處等に居るものゝ、不斷は目に見えない、此の空氣に紛れて隠れて居るのが、然うして塵も透通るやうな心持に成つたので、自分に見えるのだらうと思ひました。

現在、居るのに、看護婦さんにも、誰の目にも遮りません・・・何うかすると、看護婦さんの白い姿が、澄まして、其の女性の、衣服の中を歴々と抜けて歩行いたんです。

五日目です・・・後で知れました。

其の朝です。

黒髪の又冷たさが、染々と嬉しかった時でした。

(お前。)

と其の女性が、其のまゝ、凝視たなりで口を利まして。

「えゝ、其の何かぞ？」

「今でも聲さへ忘れませんわ。」

(お前は澁太いの・・・先づ餘所へ去にます。)

ツて、じろりと一目見て、颯と消えました。・・・何處へ参つたか分りません。

午前、回診においでなすつた醫師が、喫驚なさいました。不思議なくらゐ、其の時から脈がよく成つたんです・・・

其の晩、翌朝と、段々、薄紙を剥ぐやうでせう。

まあ、此の分なら助かります。實はあきらめて居ただつて、醫師もおつしやいます。あの室は、今夜だ、今夜だ、と方々の病室で、然う言つたのを五日續けて、附添ひの、親身のものには聞いたんですて。

然うしますとね……私の方が見直しました  
二日目の夜中です……隣の室においでなすつ  
た御婦人の、私と同じ病氣でした。其は、此方と違  
つて、はじめから様子のよかつたのが、急に變かは  
つておなくなりになりました。死骸は、あけ方に裏  
門を出て行きました。

眞に、罪な、濟まない事ぢやあるけれども、同一  
病人が枕を並べて伏つて居ると、どちらかに勝まけ  
があるとの話。壁一重でも、をんなじ枕。お隣の方  
は身代りに立つて下すつたやうなものだから、此方  
が治つたら、お墓を尋ねて、私も参る、お前も一所  
に日参しようね。

と姉が云つてくれるんです。  
最う、寝ながら私は、両手を合はせて回向をしま  
した。

日に増し……大丈夫と云ふ時に、主人が、  
鉦たゝきの事から、裏門を入つた事など話しました  
ツけ、ー 心も確で、何にも氣に掛らないほど、  
よく成つたんです。

髪を結んでもらひました、こんなに……  
と、優しく櫛巻に手を觸れて、嬉しらしく云つ  
たが、あど氣なく、而して、かよわい姿が、あはれ  
に見えた。

「朝、牛乳を飲んで、涼しく、のんびりとして、  
何となく、莞爾して一人で居ました。

（おぎい、おぎい、）

ツて聲がします……

あゝ、明方にお産があつた。

おなくなんなすつた室の、次の室はあいて居て、  
其の次の室に、十八におんななさる……  
産の方があつたんです。其處で聞えるのを、うつか  
り、聞いて居ましたツけ。

廊下をばた／＼と来て、扉をあけながら、私ども  
の看護婦さんが、

（まあ、可厭な、まあ可厭な。）

と云ひ／＼、づか／＼と入つて来て、

（貴女、一軒、あのお隣さんが、變なことを云ふ  
んですよ。唯今、何うしたんですか、急に、思ひも

掛けない、悪い容體にお變んなすつたんですがね。  
皆が壓へても、震へ上るやうに、寢臺の上から、天井を見、あれ／＼彼處に變なものが居て、睨みま  
す、とつて頂戴、よう、とつて頂戴。あれ、釣下つ  
た電燈の上の所に、變な物がつて、身悶えをするん  
ですもの。氣味の悪さツたら！）  
私は水を浴びるやうに悚然して、聲も出ませんで  
した。

遁腰に、扉を半開きに壓へて、廊下を透かしなが  
ら、聞定めて、

（あれ、おなくなんなすつたんだ。）

ドン、と閉めて駈出して見に参ります・・・  
其の聲音と、遠くへ離れて、

（おぎい、おぎい。）

と幽に成つて行つたのは、お産婦から引離して、  
嬰兒を連れて退らしい。・・・

三ツ四ツの壁越ですが、寢臺に私、凍りついたや  
うに成つて、熟と其方を見て居ますと、向きました、  
高い壁と、天井の敷合はせの所から、あの、女性

が、  
「

「え、」

「見上げます所に坐つたなり、膝へ折つた襦をふはりと落して、青い衣服が艶々として、すつと出て、

（お前、何うしても又来たよ・・・）

と、其處から膝に手を組んで、枕許へふら／＼と、下りたんです。其の脇の下の兩方を、背後から何ですか、大な黒い手が二ツ出て、据ゑて持つて居たんです。

寢臺と、すれ／＼の所へ坐りますと・・・

ふと言淀むかして、黙つて、美人は背後を振りむいた。

唯吉も我が座敷の背後を見た。

「もう少し・・・」

と向うの二階で、眞暗な中で云ふのを聞いた。  
唯吉は確乎と敷居を掴んだ。

婦人は、はつきりと向直つて、

「あゝ・・・其の黒い大な手が、蒼い袖の下からすつと伸びて、わ、私の咽喉を、」

はツと思つたのは、凄じい音で、はた、と落した  
團扇が、カラ／＼と鳴つて、廂屋根の瓦を、這つて、  
草の中へ落ちたのである。

「あれ、」

と云ふ、哀しい聲に、驚いて顔を上げると、呀、  
影の如く、黒い手が、犇と背後抱きに、其の左右の  
腕を掴み挫ぐ。此に、よれ／＼と身を絞つた、美人  
の眞白な指が、胸を壓へて、ぶる／＼と震へたので  
ある。

唯吉は一堪りもなく眞俯ぶせに突俯した。．．．

夜は蟲の音に更け渡る。

唯吉も我が座敷の背後を見た。し

「もう少し．．．．」

と向うの二階で、眞暗な中で云ふのを聞いた。

唯吉は確乎と敷居を掴んだ。

婦人は、はつきりと向直つて、

「あゝ……其の黒い大な手が、蒼い袖の下からずつと伸びて、わ、私の咽喉を、」  
はつと思つたのは、凄じい音で、はた、と落した團扇が、カラ／＼と鳴つて、廂屋根の瓦を、辻つて、草の中へ落ちたのである。

「あれ、」  
と云ふ、哀しい聲に、驚いて顔を上げると、呀、影の如く、黒い手が、犇と背後抱きに、其の左右の腕を掴み挫ぐ。此に、よれ／＼と身を跌ついに、美人の眞白な措が、胸を壓へて、ぶる／＼と震へたのである。

唯吉は一堪りもなく眞俯いふせに突俯した。  
……夜は蟲の音に更け渡る。

【完】